

龍膽寺雄

蘇工業學院圖書館

藏書章

龍膽寺 雄全集 第十一卷

昭和六十一年四月二十日 印刷
昭和六十一年四月二十五日 発行

著 者 龍膽寺 雄^{りゅうたんじ ゆう}

神奈川県大和市中央林間二一四一五

発行者 龍膽寺 雄 全集刊行会

河野 進

発売所 株式会社 昭和書院

東京都新宿区神楽坂二一一九
銀鈴会館二〇七号 下 一六〇
電話 〇三二六〇九三五四
振替 東京七一八三二七二

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 三、四〇〇円

©1986 Y. RYUTANJI

ISBN4-9151122-56-5

目次

創作小説（昭和初期編）

虹と兜虫（長編伝奇小説）

第一章	兜島に住む人たち	7
第二章	玖須子爵	51
第三章	兜	81
第四章	ガラメキ鉱泉	105
第五章	天狗窟	141

第六章	廃金鉞	169
第七章	鎧武者	199
第八章	海では	253
第九章	宝蔵の抜穴	271
第十章	大団円	325
初出		335
解説		336

長編伝奇小説

虹
と
兜
虫

第一章 兜島に住む人たち

三月下旬のとある静かな朝ぼらけです。

季節には早い驟雨^{とようふ}があががたさつと海を刷いて過ぎ
て、——間もなく、対岸の虹見岬の肩からかけて珍しい
朝虹が、鮮かな七彩の片脚をくつきりと空に掲げるので
したが、折柄、兜島の西の入江に近い木霊閣^{きだまかく}の画廊の建
築場では、夥しく積まれた大理石の濡れた石材に腰を
おろして、建築美術家の緑ヶ丘氏が、煙脂^{えんし}に染んだ素焼
のパイプからノビノビと、煙の塊^{かたまり}りを空に吐きながら、
高いところを載る雨脚の面紗^{めんさ}にぼかされて、見る見る形
を薄めてゆくこの片脚虹を、残り惜しげにさつきから仰

いでいるのです。

「どうだね、幽^{ゆう}か」

彼は獅子の鬣^{たてがみ}を思わせる鬚^{ひげ}の辺りの長い捲毛に、糸
のように煙をからませながら、優しく眼を顰^{しか}めて、

「虹の詩は君出来たかね？」

「いいえ。」

傍に、これも彫りかけた大理石の巨大な花鉢に腰をか
けて、一緒に岬の虹を仰いでいた黒天鷲^{くろてんじゆ}絨^{じやう}のルヴァン
カの少年は、鼻すじの纖^{ほそ}つすらした美しい細面^{ほそおもて}を振向け
て、明るく微笑むのです。

「どうも、硝子細工のようなあのほかない瞬間の美がうまく出ないんです。」

「大理石のがちりした組象嵌になるかね。」

「ならまだいいんですけれど、」

少年は笑って、鉢の縁から立って、

「言葉って奴は絵具と同じように繊細なもんですからね。まだ画布へならどうやら写せそうでしたけれど……」

「そこへもって来て、」

と、緑ヶ丘氏は煙と一緒に朗かに冷かすのでした。

「……片一方きア脚のない虹だからね。なおさらむずかしいさ。人間だって片ちんばじゃヨチヨチ歩ききア出来アしない！」

森蔭の傾斜はやっと雪が消えたばかりで、地面は冬の頃の荒れた苔に鱗のように覆われたまま、さすがに春浅い三月の朝は、地球のしんの冬の冷却が地面に近く、白と息を凝らせるのでした。

作業時間の来ない画廊の建築場は、まだひっそりとして、ギリシャ破風をささえて立った十六本の大理石の円柱が、石材の堆積の向こうに薔薇色に朝日に輝いて、——森では、名の知れない小鳥の声が、時折鍵形に空間をひ

び割らしては、森閑と啼交しているのでした。

一体、木霊園のこの画廊は、兜島の持主である白鳥伯爵が、嘗てヨーロッパを歴遊中に、イタリアやフランスやドイツで蒐めたさまざまな古典芸術、絵画や彫刻や織物や古陶やそういったものを、なかば展覧の便宜を兼ねて秘蔵するために、自分の持島のこの山荘に建築を思い立ったので、その設計と工事を依頼された緑ヶ丘氏は、選抜いた熟練石工十名程を東京から伴って来て、最早まるまる一年、周囲二里に充たない淋しいこの小島に籠っているのです。三十八歳でまだ妻を迎えない独身の彼は、十九になる甥の幽と一緒に島へ呼寄せて、絵かきで詩人であるこの少年に仕事の一部——室内装飾や家具調度などの図案設計を手伝わせながら。

「おい、幽。」

時折緑ヶ丘氏は、寵愛してゐるこの十九の少年を覗いてうのでした。

「東京が君恋しくなりアしないかね？」

「いいえ。」

幽はのんきに明るく、

「虹見岬の漁業飛行場へ行って無理に頼めば、東京ぐら

い雑作ありませんからね。ひどく東京が恋しくなったら、おじさんが午睡をしてらっしゃる間にでも、ちょいと脱け出して行つて来ますよ。」

その単葉の漁業飛行機が朝日を浴びて今やキラキラと虹の消えた岬の空に舞っているのです。まるで雲母のかけらでも降るように。――

「さて。」

緑ヶ丘氏は大理石の円柱の唐草を彫りかけた柱頭から、湿っぽい西洋寝衣のお尻をもたげて、

「そろそろ顔でも洗ってくるかね。どうだね、君は谷におりないかね？」

なるほど！

鬘のようにのびた彼の髪の顚顚の辺りは、枕の痕がモシヤモシヤと眼立ち、古ぼけた西洋寝衣の肩にキラキラと雲脂が光っているのは、独身のこの建築美術家先生、寝起きでまだ顔も洗わなかったと見えます。

「そう、……」

幽はルヴァシユカの紐の金色の房を腰にゆるがしなから、大理石の石材から苔の傾斜へ跳びおりて、

「じゃ僕、ちょいと歯刷牙子と石鹸とを持って来ますからね。」

「ふむ。」

緑ヶ丘氏は鼻から卵の殻のように煙の塊りを空間に吹いて、

「さきに出かけてるからね。」

「え！」

木霊閣の画廊の建築場から密林の傾斜を二丁程谷へおりと、岩を覆った深い苔の間から清水が湧き出て、それが手頃な洗面器ほどに岩の窪みへたまつて、硝子のように冷たくいつも透徹しているので、緑ヶ丘氏は毎朝歯刷牙子を啣えてはタウエルをぶらさげて、明方の建築場を見廻りがてら、わざわざここまで顔を洗いにおりるのです。

木霊閣の贅沢な桃色大理石張りの化粧室では、壁に並んだ金の龍頭から沸々と湯気を噴いて、飾り枠のきらびやかな化粧鏡を面紗で覆ったように曇らしているのに。

――そのくせ彼は、毎朝岩の窪みのこの清水のたまりへ指を突っ込むたんびに、
「おお冷てえ！」

と跳び上がった、——もっとおかしいことには、火傷でもしたように、濡れたその指を慌てて耳たぶへ持つて行くのです。

彼に依ると、熱いのと冷たいのとは、ま、一緒で訳になるのだ。——

「あら、どこへいらっしゃるの？」

歯刷子を横に啣え、タウエルを指に翻えして、木霊閣の離れから太鼓橋を渡って、通り縁の青石の靴脱ぎへ足をおろした時、幽はふと、内庭を隔てた釣殿の、高い勾欄のところから声をかけられて、靴紐を指から放すのでした。

「谷へいらっしゃるのですたらあたくしも伴れて行つてヨ！」

珊瑚です。

十七になる伯爵のこの娘は、毎週土曜日にはきまつて、対岸の虹見岬の本邸からモーターボートで海を横切つて、島のこの山荘へやつて来ては泊まつて、幽たちを相手に父の伯爵や執事たちの眼の無いところで、はめを外してはしゃぎはしゃぎするのでした。

「あなたお一人？ 緑ヶ丘のおじさまは？」

珊瑚は絵歌留多の模様のついた真つ赤な友禪の袂を翻えして、階段をひと跳びに跳びおると、朝の挨拶を改めてしかけた幽などには一切おかまいなく、靴脱ぎのぐるりに自分の履物を眼さがしして、

「何かあたくしの履物そこらになアい？」

「僕、じゃお玄関から持つて来てあげましょう。」

「いいのヨ！」

こごんで靴紐を締めかけた幽の華奢なまるまっこい背中へ、彼女は乱暴にのしかかつて、

「じゃ負んぶしてヨ。……」

「危い！」

幽は靴脱ぎの上でヨロヨロして、

「駄目です。雨でぬれて坂が滑るから。香川さんに叱られますよ。じゃ僕の草履を離れから持つて来て上げましょう。ちよいとここ放して。……」

「あなたの体、ガソリン臭いわヨ。」

離れの玄関から廻して貰つた幽の草履をつっかけて、幽とつれだって、驟雨に濡れた飛石を伝いながら、珊瑚がいうのでした。と、——ふと彼女は足をとめて、

「あら、飛行機、宙返りをしてるわ。」

幽は低い森を越してキラキラと朝日を射返した海の上に、刃物のように時折翼を光らしながらクルリクルリ廻っている飛行機をちょいと仰いで、——ルヴァシユカの襟の辺りを指で弄もよほってみるのでした。

「ガソリンじゃないベンジンでしょう。ここんとこ汚れたので、ベンジンで昨夜拭いたもんですからね。」

そうして、大理石のかけらの散らばった傾斜を先に立つて歩きながら、

「今朝の虹識しってますか？」

「無論。」

「無論？」

幽は足を止めて、珊瑚を振り返るのです。

「無論、……それから？」

「無論、識らない！」

珊瑚はしなやかな友禪の肩を幽に凭よらして、朗かに笑うのです。夜の静寂をそのまま持越したような森の朝の静けさ！ 彼女の笑い声はその中へ珠のように麗朗と反響するのでした。

「あたし、だって昨夜寝んだの一時よ。」

「僕なんぞ二時ですよ。」

「じゃ、あれから何してらしたの？」

「だから、今いったじゃありませんか。」

幽は存外冷たい湿っぽい珊瑚の手に指をとられたまま、

「ルヴァシユカの襟を拭いてたんです。」

昨夜珊瑚は、山荘番の木島老人と緑ヶ丘氏と幽と四人で、木霊閣の能舞台に隣った控の間でトランプをやつて、十二時過ぎまで莫たゞの煙の中で夜更しをしたのです。

オークション・ブリッヂで勝った組と負けた組とがそれぞれ、やんけんをして、選手を出して強制的に互に接吻をし合わなきアならないという規定だったのでしたが、緑ヶ丘氏と山荘番の木島老人と、この殺風景な男同志が勝組と負組との代表に選ばれて了つて、——緑ヶ丘氏は仕方なし、『瘤取うぶとりちいさん』と珊瑚に綽名されている木島老人の、水っ洩みづはらの光る鼻の下へ唇を吸い付けたわけなのです。

「つまらないわ！」

夜別れぎわに珊瑚は、鼻から甘えて幽にいうのでした。

「じゃんけんで負けた組が選手になるとよかったわね。

……瘤取りじいさんに接吻するなんて、された方でもした方でも迷惑だわ。」

「朝御飯のあとでまたブリッヂしない？」

珊瑚は谷へおりの木の根の階段を幽に手を取られて要心深くおりながらいうのでした。

「あたくし、今度きつとじゃんけんに勝つわよ。」

「だって、」

と幽は齒刷牙子を啣えかけて、

「お客様が今日は島へいらっしやる筈でしょう？」

「でも、」

と珊瑚はちよいと詰って、

「あたくし、玖須さん嫌いヨ。お父様たちお見えになったら、あたくしどこかへ隠れちゃうワ。」

そういいながらも、しかし珊瑚の顔には何かしら浮々した一抹の輝かしさが現れるのでした。

お客様の玖須さんというのは、白鳥家の母方の親戚にあたる玖須子爵の若い当主の事で、去年の春大学を出てから暫くヨーロッパの各地を遊び廻って、このお正月に帰朝すると、新聞に専攻の美術評論の筆などをとりはじ

めたのでしたが、最近繁々と白鳥家に出入りをして、兜島の、木霊閣に伯爵が秘蔵するヨーロッパの古美術の研究をしたり、時には伯爵夫人や珊瑚たちと他愛もなく幾日かを島に遊び暮らしたりなんぞしているのです。

「玖須さんはね、」

と、珊瑚は忙しく齒刷牙子を口に動かしている幽を顧みて、思い出したようにいいます。

「島へいらしても、ヨーロッパの古美術なんぞよりも、多分あたくしに興味をもつてらっしゃるのヨ。」

ナマいきいてたら、といった眼で幽は、

「なぜ？」

「だって、」

と珊瑚は袂を翻えして木の根の階段を跳びながら、
「木霊閣へいらっしやると、あたくしお父さまのいいつけでよく玖須さんを画廊へ御案内したりするでしょう？
そうするとね、玖須さんは肝腎の絵や壺などはろくろく見ないで、葉巻を吸ってはあたしとお話許してらっしゃるのヨ。いつかなんぞ、画廊であたくしと二人っきりの時、不意にあたくしの肩を抱いて、そうして耳に口を

寄せておっしゃるのよ。あなたは恋愛について何か今までにお考えになった事ある？　ですって。」

「その位、誰だっというじゃありませんか。」

幽は淡泊に、

「僕だっでもしかするといいますよ。」

「いつ？」

「そりゃ機会次第ですけれど。」

「こないだね。」

と、珊瑚は苔蒸した大きな樫の根方に不意に足をとめて、自分で口調を変えて、

「お母さまがそうあたくしにおっしゃるの。あなたには一体どんなお婿さんがお気に召すんでしょうねえって。」

そうして、玖須子爵はなかなか家柄もよし財産もあり風采も立派だし気だてもいいし、若しあなたをお嫁さんに欲しいって子爵がおっしゃったら、あなた承諾する？　ですって。……」

「で、あなたの御返事は？」

「あたし、……」

珊瑚はいたずらっぽい眼で相手を睨めて、

「あたくし承諾するっていったわ無論。」

そういつて、突然びっくりするような高笑いを立てるのでした。

「嘘、嘘、嘘、……あたくしの残らず空想よ。」

幽は割合まじめに、

「じゃ何て答えたんです？」

「あら！」

珊瑚は華奢な幽のルヴァシユカの肩へ両手を廻して、接吻の欲しげな唇を近寄せて、

「そんなことまさかお母さまおっしゃりはしないわ。みんなあたくしの空想よ！」

そうして、高い梢の小鳥の声に無邪気に顔を仰向けて、

「あたし本当は玖須さん嫌いなもの。」

「なぜ？」

「だって、あの方の頭あたくし靴刷毛みたいだと思うワ。」

「玖須さんにいいつけてあげますよ。」

「いいわ。」

珊瑚は明るく、

「あなただっいつか玖須さんの悪口おっしゃったわ

よ。」

「何て？」

「燃えさしの金口莫だって。」

「そりア悪口じゃない詩的形容ですよ。あのしかつめらしい貴族の末裔が何がなし金口莫の燃えさしを連想させるからです。でもそんな気がしませんか？」

「靴刷毛だって詩的形容よ。」

「そんな詩的形容があるもんですか？」

「あるわヨ！」

そういつて彼女は、冷たい指でだしぬけに相手の唇を摘んでねじって、その仕返しをされないうちに素捷こく地面に匍った太い樅の木の根から、泉のきわへ跳びおりのでした。岩に湛えて苔を帯びた透徹な清水！しかし、先に谷へおりて待っている筈の緑ヶ丘氏の姿はどこにも見えず、あたりには、閑寂な小鳥の声だけが。――

「緑ヶ丘さん先におりていらしてたんじゃない？」

珊瑚に訊かれて、幽は人氣の無い谷の辺りを見廻して、――それから、両手で口を囲って、大きく叫ぶのでした。

「おじさあん！」

が、答えるのは森閑とした森の反響だけ。

緑ヶ丘氏は実は其の時画廊の建築場から谷へ向かつて傾斜を左へおるかわりに、中途からふと気が変って、素焼のパイプへまた新らしくバットを詰め代えて、煙の塊を残し残し、――尾根の腹を右へおりていったのです。

蟹仙窟の朝を訪ねようと。

「おじさあん！」

「おじさあん！」

一つは幽の声。一つは、幽のまねをした珊瑚の声。この二つの叫び声が遠い尾根の向こう側から森の朝の静寂に反響して響いて来た時、緑ヶ丘氏は蟹仙窟の巨大な楠の洞穴の主人の「森の仙人」と、のんきに焚火を挟んでいるのでした。

海に近い谷合いのこの巨大な楠の洞穴に籠って、養子だという十七になる男の子の苔太郎と、太古の石器人のような風変わりな生活をしている「森の仙人」、蟹八足というのはいく本名なのか雅号なのか、木の芽を摘んだり草の根を掘ったり、乞食じみてはいても嘗て物乞をし